

幕末の文学

出席者

前田愛（司会）

神保五弥 野口武彦

松田修 延広真治

橋川文三 芳賀徹

富士川英郎

独立不羈三千年來の大日本、

一朝人の羈縛を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。

那波列翁を起してフレーヘッドを唱へねば復悶医し難し。

僕固より其の成すべからざるは知れども、

昨年以来微力相應に粉骨碎身すれども裨益なし。

徒らに岸獄に坐するを得るのみ。

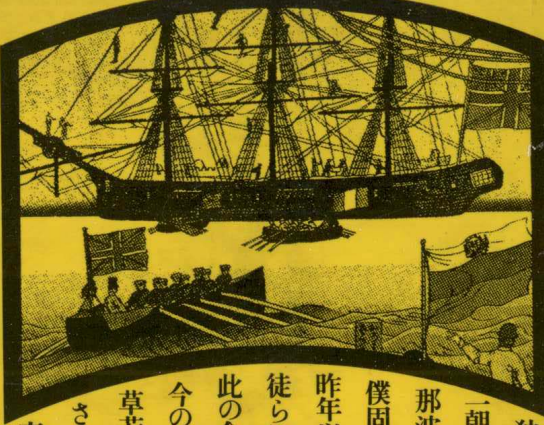
此の余の処置妄言すれば則ち族せられんけれども、

今の幕府も諸侯も最早酔人なれば扶持の術なし。

草莽崛起の人を望む外頼みなし。

されど本藩の恩と 天朝の徳とは何如にしても

忘るるに方なし。——吉田松陰 北山安世宛書簡 安政六年四月七日より



シンポジウム 日本文学 II

出席者略歴

まただ・あい 一九三二年生まる。東京大学卒業。現在立教大学教授。主要著書は『幕末・維新期の文学』（法政大学出版局）『近代読者の成立』（有精堂）『成島柳北』（朝日新聞社）など。

のぐち・たけひこ 一九三七年生まる。早稲田大学卒業。現在神戸大学助教授。主要著書は『三島由紀夫の世界』（講談社）『江戸文学の詩と真実』（谷崎潤一郎論）（以上中央公論社）など。

じんば・かずや 一九三三年生まる。早稲田大学卒業。現在早稲田大学教授。主要著書は『為永春水の研究』（白日社）など。

まつだ・おさむ 一九二七年生まる。京都大学卒業。現在国文学研究資料館教授。主要著書は『日本近世文学の成立』『日本芸能史論考』（以上法政大学出版局）『刺青・性・死——逆光の日本美——』（平凡社）『蘭のユートピア』（新潮社）など。

のぶひろ・しんじ 一九三九年生まる。東京大学卒業。現在東京大学助教授。主要論文は『名古屋における木下奎太郎』（奎太郎記念館）など。

はが・とおる 一九三一年生まる。東京大学卒業。現在東京大学教授。主要著書は『大君の使節』『杉田玄白・平賀源内・司馬江漢』（以上中央公論社）『渡辺華山——優しい旅人』（淡交社）など。

はしかわ・ぶんそう 一九二二年生まる。東京大学卒業。現在明治大学教授。主要著書は『日本浪漫派批判序説』『近代日本政治思想の諸相』（以上未来社）『逆順の思想』（勁草書房）など。

ふじかわ・ひでお 一九〇九年生まる。東京大学卒業。現在東京大学名誉教授・玉川大学教授。主要著書は『リルケ、人と作品』（東和社）『江戸後期の詩人たち』（麦書房）『菅茶山と頼山陽』（平凡社）『西東詩話』（玉川大学出版部）など。

司会者の諒解により検印を省略します 523

シンポジウム日本文学 11

幕末の文学

昭和 52 年 3 月 25 日 初刷印刷
昭和 52 年 3 月 30 日 初刷発行

司会者 前田 愛
発行者 鶴岡 隆巳

発行所 株式会社 学生社

東京都千代田区九段南 2-2-4（郵便番号 102）
電話 03(263)2611(代) 振替・東京1-18870 番
編集担当 堀 健二郎

落丁・乱丁本はおとりかえします
Printed in Japan

幕末の文学

前田愛 （編著）

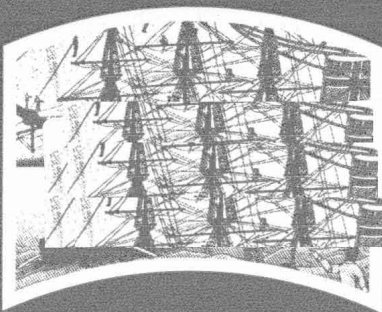
出版者

神保五弥 野口武彦

松田修 延広真治

橋川文三 芳賀徹

富士川英郎



シンポジウム 日本文学

Ⅱ

出席者

前田愛（司令）

神保五弥

野口武彦

松田修

延広真治

芳賀徹

橋川文三

富士川英郎

装幀

杉浦康平・鈴木一誌

『シンポジウム』日本文学——幕末の文学・目次

はじめに——幕末文学の現代的意義——	二
--------------------	---

第一章 巷談・雑説の文学

〈報告〉 神保五弥

後期戯作と読者層	一六
人情本と性の理想像	二五
滑稽本と話芸	三六
三遊亭円朝	四六

第二章 馬琴の小説世界

〈報告〉 松田修

小説空間としての関八州	六
馬琴における美学とイデオロギー	一四
「俠客」と「美少年」	二七
里見王国の行方	三六

第三章 変革期の儒者・文人像

《報告》 野口 武彦

無用から有用へ……………六七

幕末の起点……………六九

茶山をめぐる交友圈……………七九

文化・文政の小春日和……………九〇

水戸学の課題……………一〇四

『日本外史』におけるロマン的なもの……………一二〇

星巖と一斎……………一二七

第四章 西洋像の転回

《報告》 芳賀 徹

ナポレオン戦争と鎖国日本……………一三五

水戸学の西洋像……………	一〇
蘭学者の場合……………	一五
華山の周辺……………	一四
蘭学と漢学……………	一五
象山と幕末の兵学……………	一八

第五章 志士の文学

〈報告〉 前 田 愛

長崎遊学の意味……………	一五
自己発見と歴史意識と……………	一六
松陰の文体……………	一六
下田踏海をめぐって……………	一七
『講孟余話』の問題……………	一八
松陰における「狂」……………	一八
松陰以後……………	一八

第六章 佐幕派の遺民たち

《報告》 前 田 愛

鋤雲の役割	一九五
柳北の反骨	二〇三
桜痴と枕山	二〇八
遺民・逸民・棄民	二二四

あとがき	三九
索引	三二

幕末の文学

はじめに——幕末文学の現代的意義——

前田 幕末の文学が、こういう種類の企画で一卷を当てられたというのは、ちょっと珍しいことではないかと思ひます。最初に、この幕末の文学がここで取り上げられることの意味を考えておきたいと思ひます。

なぜ幕末という文学史の一時期が注目されるようになったかと申しますと、これはやはり、七〇年代というのが変革期であるということ、価値の転換期であるということ、そこから一つの歴史のアナロジーとして、同じく転換期である幕末というものが顧みられるようになったのではないか、それが一つです。

それから、カッコつきで申しますけれども、近代というものが、近頃だんだん疑わしくなってきた。その近代というものの意味を問い返そうという動きがあらわれてきた。それにつけてまして文学の領域では近代リアリズムというもの揺らぎ始めてきた。そのところで、近代以前の幕末の文学、あるいは近世の文学というものに新しい照明が当てられるようになったのではないかと考えるわけです。

幕末の文学が注目をあびたときは、最近では戦争中がそうでした、水戸学をはじめとして勤皇文学の研究が盛んに行われた。たとえば、日本浪漫派の保田與重郎が天誅組に参加した国学者、伴林光平ばんばやしみつひらの『南山踏雲録』に関心を示したのが、そのひとつの実例です。あるいはまた戯作が、戦争中から戦後のごく早い時期にかけて石川淳などの豁晦の拠点として問題になったことがありましたけれども、これもやはり、時代の転換期というものとかかわりがあったのではないかと思ひます。

ところで、幕末の文学は、日本の文学史の中で、かなりながいあいだ日陰者みたいな奇妙な位置を与えられてきたわけですが、そのもとをたぐっていきますと、どうも坪内逍遙の『小説神髓』（明一八一九）にあるのではないかと考える。逍遙の『小説神髓』では、馬琴の文学が、勸善懲惡の名のもとに否定されました。それからもう一つ、小説は美術であり、そして小説こそは文学の一番進化したジャンルであると、こういう考えのもとに、文学概念というものがかなり狭められたということがある。そこで、それまでの日本人の文学についての通有の観念であった儒学・漢詩文を主体とする文学概念というものが大きく改められたんじゃないか、それは結局、文学の自律性という主張につながるわけですが、いわば、近世以前の文学の主要な部分を占めておった漢文学が切り捨てられたということが言えると思います。

逍遙という人は、明治初期の知識人にしては珍しく漢学のできなかった人でありまして、戯作のほうはいへん読んでおったんですけれども、そういうところから政治・思想にかかわる士大夫的な文学概念とが切りすてられ、改良された戯作小説中心の文学の優位が決定された。この『小説神髓』の評価についてはいろいろ問題がございすけれども、結局、この『小説神髓』が打ち立てた文学概念というものが、近代の文学概念を導き出したということが言えると思います。そして、そこで文学を評価する基準になったのは近代主義であり、またヨーロッパ、アメリカ文学であります。ところが、この『小説神髓』が打ち出した文学観自体が、現在ではかなり疑われるようになってまいりました。そして、幕末の文学というものが、いろいろな形で照明を当てられることになってきた。

たとえば戯作を取り上げてみましても、井上ひさしさんの『表裏源内蛙合戦』（昭四〇）という奇妙な作品がございす。これは、近代のリアリズムのことばの考え方からしますと、ふとどきな作品である。近代のリアリズムというのは、ことばと対象というものが、一対一で対応するというのが大前提になっているわけですが、井上さんの作品は、洒落とか地口とか掛けことばとかという言語遊戯を、たいへん豊かにちりばめてある。それから、あのことばは、活字のことばに慣れてきた読者に、異様な印象を与える。つまり、話しことばというものが土台になっておるわけです。要

するに、ことばのナンセンスというものが、井上さんの文学では復権してきている。そういうところから、やはり戯作文学のナンセンスというものが顧みられる一つのきっかけができてきたんではないかと思えます。

それから馬琴の文学ですが、これは先ほど申しましたように、逍遙の『小説神髓』によって否定されて、近代の小説とは全く無縁な文学ということになっておりましたけれども、しばらく前に亡くなった三島由紀夫が、たとえば『椿説弓張月』(昭四四公演)で、馬琴の原作を劇化した。あるいは、ちょっとまえに子供たちの間でたいへん人気になりました『新八犬伝』というテレビの人形劇がありましたけれども、こういうものが出てきたということは見のがせないことだと思う。そしてまた、馬琴の文学の持っている幻想性というものが、あらためて再評価されてきております。

また、幕末の漢詩文系統の文学でありますけれども、これについてもいろいろな人が手をつけ始めている。たとえば中村真一郎さんの『頼山陽とその時代』(昭四六)は、その一つの例でありますし、富士川英郎さんの『江戸後期の詩人たち』(昭四二)というすばらしい本もあるわけです。

ところで、きょうご列席の方々には、この幕末の文学というものに、いろいろなところからアプローチしていらっしゃる方ですが、神保五弥さんは、『為永春水の研究』(昭三九)という著書がございまして、いままで不当に低く評価されてきた戯作のために、昔からがんばっていらっしゃる方です。

松田修さんは、最近、日本の旅人シリーズで『十返舎一九』(昭四八)をお書きになった。それから、馬琴についてはたいへんユニークな見方を最近出されております。

それから野口さんは、同じ旅人シリーズで『頼山陽』(昭四八)をお書きになっている。それからちょっと前には、『江戸文学の詩と真実』(昭四六)という書物で、これまで見のがされてきた、江戸の漢文学というものに照明を当てておられます。

それから延広さんは、舌耕文芸、つまり話芸の専門家でありまして、いまではこの方面の一番新進の研究者でいらっしゃるわけです。

こういう方々をお招きして、きょうは幕末の文学というものを考えてみようと思うわけですか、しかし、この幕末の文学のトータルなイメージというものは一体何かというと、これはたいへんにむずかしいと思います。それは一つには、いわゆる上の文学とされる漢詩文と、下の文学とされる戯作文学、これをどのようにに統一的につかんでいくかという問題が非常にむずかしい。それからまた、幕末という時期を一体どのように考えるか。その時期区分の問題もたいへんめんどろであると思います。歴史学のほうでは、天保の改革（天保二―一八四一）あるいはペリーの来航（嘉永六―一八五三）そういうものが一つの区切りになっておりますけれども、文学のほうでは、一体幕末はどこから始まるかというのは、非常にむずかしい問題だろうと思います。

こういう具合に、幕末の文学を一つの文学史の時期として認めていいかどうかもはなはだ疑わしい、またうさんくさい時代ですけれども、この時代をめぐって、自由に皆さんのご意見を伺いたいと思うわけでございます。

最初にとりあげるテーマは「巷談・雑説の文学」であります。このテーマではどういうジャンルを扱うかと申しますと、寛政の改革（天明七―一七八七）寛政五―一七九三）以降新たにあらわれてきた江戸小説のジャンル―滑稽本、人情本、あるいは合巻、それに話芸というものを一まとめに扱ってみたいと思うわけですから、最初に、問題提起者の神保さんから、寛政の改革以降、いわゆる中本と呼ばれる滑稽本や人情本が、どういう具合にしてジャンルとして確立してきたか。そのへんのところをお話しいたいと思います。

第一章 巷談・雑説の文学

巷談・雑説の文学とは、読本を除く、寛政の改革以降の江戸戯作と、舌耕文芸とを合わせたものと理解していただく。

現代の研究者の立場から、正面から立ち向かうほどのすぐれた作家や作品の乏しいこの時代の文学は、大きくひとつのジャンルをどのように近世小説史の中に位置づけるか、あるいは歌舞伎や音曲などをふくめてのこの時代の文化の一環としてとらえるといった姿勢をとらざるを得ないと思うのだが、そのために以下のような問題が、現段階では考えられるのではないかと思う。

1 寛政の改革以降、享和から文政初年にかけて、滑稽本(中本)・人情本がジャンルとして確立するまでの文壇の状況がまだ明確にとらえられていないのではないか。この点についての切り込みは、中村幸彦先生の「中本型読本と人情本」(『近世小説史の研究』所収)、前田愛氏の「江戸紫一人情本における素人作者の役割」(『国語と国文学』昭三三・六)など、わずかしは見当たらないのではないか。

2 中本や人情本が成立する事情について他の江戸文化との関

報告 神保五弥

連において考える必要はないのだろうか。たとえば三馬や鯉丈の中本が、落語や茶番と関連があることは指摘されているが、一九の『膝栗毛』が俄と関連があることを三田村鳶魚氏が述べているが(『江戸文学評釈叢書・滑稽本集』解題)、この点について発言した例をまだ見ない。あるいは、人情本と音曲・歌舞伎との関連もあるが、それらを明らかにした上で、この時代の作者たちが、文学をこのように考えていたかという点が、もう一度問いなおされてよいのではないか。

3 歌舞伎や音曲などを素材としたような作品にも、なお当代の社会の事件を踏まえたものが多くあるのではないか。中本『櫛の二葉』は、川上不白の家に仕えた女性と、出入りしていた若侍の情死事件に取材していることがわかっているが、このような例はなお多いのではないか。素材の追求は、きわめて不十分なのが現状ではないか。

4 作者と書肆とのかかわりあい、ある程度まで判っている